

石川三四郎の「土民生活」——権力への抵抗

はじめに

前章で見た江渡狄嶺とは異なり、石川三四郎（一八七六—一九五六）はもともと平民社同人として、幸徳秋水、堺利彦、西川光次郎、木下尚江、安部磯雄らとならぶ明治社会主義者として出発したように、その帰農思想は社会運動との関連においてとらえることができる。大正期に入り石川は西欧に「亡命」し、帰国後アナキストとして活躍するが、生涯彼は広い意味での社会運動家であった。

その思想は、一口にいえば権力への抵抗思想として要約できよう。石川の考える権力とは国家権力だけではない。社会に遍在する権力を無化することをめざした言葉の本質的な意味におけるアナキストであった。石川は、狄嶺のように農の価値本質の追求に向かってその理論体系を築き上げることはなかったが、遍在する権力を対象にしていたがために、狄嶺には欠けていた帰農に基づく社会思想が言説として、また生活態度として積極的に表現されることになった。かりに狄嶺を「農本的ナシヨナリスト」とよぶならば、石川は「農本のアナキスト」であった。「農本」の表現形態ばかりか意味内容においても、細部では両者は大きく異なっている。

石川は自らの思想を「土民生活」として表明している。昭和恐慌のもと農本主義（「社会」創出型）農本思想）運動が高揚すると、石川は「土民生活」と農本主義との相違を強調する。じつさい石川は狄嶺と同様、日本村治派同盟から農本連盟にいたる農本主義運動には参加せず、独自の立場を保っていた。このような歴史的事実を通して、本章では、権力への抵抗思想としての「土民生活」の本質を、農本主義との比較対照を一つの軸として明らかにすることを課題とする。

石川の略年譜は以下のとおりである。⁽¹⁾

- 一八七六年（〇歳）埼玉県児玉郡山王堂村（現本庄市）に出生、生家は船問屋。
- 一九〇二年（二六歳）哲学館（のちの東洋大学）、東京法学院（のちの中央大学）をへて万朝報社に入り、社長・黒岩涙香の秘書となる。これ以前に福田友作家に寄宿し、福田英子と知り会う。
- 一九〇三年（二七歳）平民社同人となり、幸徳秋水、堺利彦、西川光次郎らとともに週刊『平民新聞』に携わる。
- 一九〇五年（二九歳）木下尚江、安部磯雄らと『新紀元』発刊、編集兼発行人となる。
- 一九〇六年（三〇歳）田中正造に師事。
- 一九〇七年（三一歳）日刊『平民新聞』創刊（編集兼発行人）。筆禍事件で入獄（一三カ月）。
- 一九一三年（三七歳）ヨーロッパ亡命（主としてフランスでの百姓生活）。
- 一九二〇年（四四歳）帰国、「土民生活」を唱える。
- 一九二五—二七年（四九—五一歳）農民自治会運動に関係。
- 一九二七年（五一歳）東京都豊多摩郡千歳村八幡山に帰農（二反の小作百姓）。同所を「共学社」として多数の人々の交流の場とする。
- 一九二九—三四年（五三—五八歳）個人雑誌『ダイナミック』を発刊。

一九三五年（五九歳）この頃より東洋文化史研究に専心する。
一九四六年（七〇歳）日本アナキスト連盟の顧問に就任。
一九五六年（八〇歳）死去。

第一節 「土民生活」の源泉

いわゆる大逆事件（一九一〇年）によって社会主義が冬の時代を迎えたさなか、石川は種々の理由から日本を離れ、ヨーロッパ（主としてフランス）に「亡命」する（一九一三年）。そこでの生活は八年にも及んだが、一九二〇年に帰国して以降、石川の活動は「土民生活」としてはじまった。

今より丁度八年前（一九一三年）、私が初めて旧友エドワード・カアベンタア翁を英国シェフィールドの片田舎、ミルソープの山家に訪ふた時私は翁の詩集『トワアド・デモクラシー』に就いて翁と語つたことがある。そして其書名「デモクラシー」の語が余りに俗悪にして本書の内容と些しも共鳴せぬのみならず、吾等の詩情にシヨックを与ふること甚しきを訴へた。スルと其時、カ翁は「多くの友人から其批評を聞きます」と言ひながら、書架より希臘語辞典を引き出して其「デモス」の語を説明して呉れた。其説明によるとデモスとは土地につける民衆といふことで、決して今日普通に用ゐらるゝ様な意味は無かつた。今日の所謂「デモクラシー」は亜米利加人によりて悪用された用語で本来の意味は喪はれて居る。ソコで私は今、此「デモス」の語を「土民」と訳し、「クラシイ」の語を「生活」と訳して、此論文の標題とした。即ち土民生活とは真の意味のデモクラシイといふことである。

「土民」とは、「蓆旗竹鎗」を「シムボル」とする中世土一揆の主体となつた民衆で、いわば「幻影を追ふことを止めて地に着き地の真実に生きんことを希ふ」民を意味していた。⁽³⁾すなわち「地の真実」に従つて（＝永遠性に基づいて）支配従属関係をもたらず権力に反逆する民衆である。

歴史上に於ける「土民」の名称は反逆者に与へられたものだ。殊にそれは外来権力者、または不在支配者に対する土着の被治被搾取民衆を指示する名称だ。（中略）土民は土の子だ。併しそれは必ずしも農民ではない。鍛冶屋も土民なら、大工も左官も土民だ。地球を耕し——単に農に非ず——天地の大芸術に参加する労働者はみな土民だ。土民とは土着の民衆といふことだ。⁽⁴⁾

このように石川は四十代になつてはじめて自らの思想を「土民生活」として表明した。そこには、権力への抵抗、そして「永遠性に根ざす」、という意味が込められていた。石川が述べるとおり、「土民生活」は必ずしも農民を意味してはいない。職業が決定するのではなく、右記二点を志向する民衆こそが「土民」であつた。この二点から、「土民生活」の源泉を考察してみたい。

また石川は一九三〇年にエリゼ・ルクリュ（Elise Reclus 一八三〇—一九〇五）の名著『L'Homme et la terre（全六冊）』を『地人論』と題して第一巻だけ出版している。直訳すれば原著は『人類と大地』ぐらいであろう。なぜ石川はこれをあえて『地人』と訳したのか。原著は壮大な構想のもとに書かれた大著であり、「歴史は時間の地理にして地理は空間の歴史なり」という信念に基づき、人類の起源から現代（一九世紀）までをたどつた「地」と「人」の歴史であつた。ここには永遠性が存在している。いわば「地人」とは「土民」と同義であつたと思われる。

一、抵抗の原点

さて、「土民生活」形成途上における石川には、明らかに二度にわたる飛躍期があつた。田中正造に師事し、谷中村事件に奔走した『新紀元』時代（一九〇六年）と、八年におよぶヨーロッパ放浪生活時代（一九一三—二〇）の二つの時期である。これらはそれぞれ、政治への不信、⁽⁵⁾「自然」の発見という思想上の変革をもたらした。しかし「土民生活」を支えていた精神から考えてみれば、最初の変容こそ石川の思想を決定する契機になつたように思う。それを確認するためには、社会との関わりのなかで、石川が一体何を課題とし、何を解決しようとしたのか、すなわちどのような問題設

定がなされたのかを検討してみなくてはならない。

石川のばあい、社会思想形成の出発点は、たしかに平民社による明治社会主義運動への参加（一九〇三年一月）にあった。だがそれは、万朝報社の先輩であった堺利彦、幸徳秋水らの、社を辞してまで対露非戦論という信念を貫いた態度に深く感銘した結果の行動だったにすぎない。社会主義者としての必然性をもたなかった石川は、したがって、当時何ら独自の思想を展開できなかった。見られるのは、いわば知識としての社会主義や、クリスチャンゆえのヒューマニズムだけである。人生上のさまざまな苦悩に振り回されるばかりで、それらの経験を相対化し、問題意識を成熟させるには至っていない。その結果、オリジナルな思想はどこにも見出すことはできない。

このような状況が解消されたのは、『新紀元』（編集兼発行人・石川三四郎）時代（一九〇五年二月―一九〇六年二月）に、安部磯男、木下尚江ら先輩のクリスチャンとともにキリスト教社会主義の運動をはじめたことだった。この一年間で石川の思想は大きく変貌する。しかし、その理由はキリスト教社会主義の理解の深化から到達した一つの結論だったというよりも、田中正造との出会いに求められる。より正確に言えば、田中との出会いをきっかけにして、クリスチャン・ソシアリズムをも含めて思想上の不同帰点に到達したということである。

石川がはじめて谷中村を訪れたのは、一九〇六年三月三〇日のことであった。⁽⁶⁾ おそらく、このときはじめて石川は田中に出会ったのだらう。田中に出会う以前の同年一月段階では、石川は「社会階級組織を破壊する」ための「第一歩として普通選挙制度を布く」ことを主張している。⁽⁷⁾ この普通選挙要求は、政治による社会運動を是認する立場であり、普通選挙のリーダー格であった木下尚江の影響下にあったことがうかがわれる。

ところが二カ月後の三月に谷中村を訪れ、谷中村残留民とともに苦闘している田中の姿に感動して以来、石川は田中に心酔し、「殆ど駄々子のように親」（木下尚江の言）しむまでになった。編集兼発行人であった石川のこうした態度は、そのまま『新紀元』の編集方針にも反映された。その結果、五月の第七号に田中の新紀元社での講演「土地兼併の罪

悪」を掲載してからは、廃刊にいたる十一月の第一三三号まで毎号、谷中村事件に関する記事・評論がかなりのスペースをさいて掲載されたのである。

従来の認識に変化が見られるのは、まさにこの時期であり、八月の第一〇号に載せられた「堺兄に与へて政党を論ず」にそれがよくあらわれている。これは、社会党（一九〇六年一月結党）への入党勧誘を拒否した石川が、その理由を述べたものだった。石川によれば、政党運動とは、党員の多数決をもつておこなわれる議会内の勢力争いにすぎない。したがって、それはむしろ闘争を緩和し、かえって革命運動を鎮圧してしまうだろうという見解であった。わずか半年あまり前の普通選挙要求とは正反対の主張である。ここにおいて石川は、普通選挙をはじめとする政治運動に見切りをつけていたことがわかる。それでは、わずか半年あまりの間にこうした反転をもたらす原因をつくった谷中村事件とは、そもそも一体何であったのだろうか。

谷中村事件は、明治一〇年代に、足尾銅山の鉱毒事件として始まっている。⁽⁹⁾ しかし、産業資本の確立を急務とする政府は古河鉱業と手を結び、田中正造らの議会における鉱毒問題の追求を巧妙にかわしながら、裏では事件の隠蔽をはかる示談工作を展開していた。ところが、やがて鉱毒問題をこまかしきれなくなった政府は、問題の根本原因を鉱毒自体ではなく、それを農地に流し込む洪水に帰すという転倒した論理を用いて、焦点を治水問題にすりかえてしまった。こうして政府は住民に対し買収工作をおこなうと同時に土地収用法の強制適用で、谷中村の遊水池化をもくろんでいたのである。これが谷中村事件であった。

したがって、谷中村残留民と田中の戦いは、こうして地方農民の犠牲のうえに資本主義化を押し進める産業資本を背景に、その保護政策をとる明治国家に向けてなされたものであった。そしてこの戦いに参列した石川が、身をもって政治における罪悪を知り、そうした罪悪を生み出す政治自体を否定するに至ったのは当然であった。

しかし谷中村事件を引き起こしたのは、外部からの強圧的な国家権力だけではなかった。谷中村が資本と国家の権力

によって壊滅したのも、じつは内部における一人の野心家(安生順四郎)の策動によるところが大きかったのである。⁽¹⁰⁾しかも鉱毒事件発端以来、各村落エゴがむき出しになり、渡良瀬川周辺の村落が一致団結して問題に対応することができなかった。このように多様な問題を含む谷中村事件に接したことで、石川は問題意識を成熟させていった。それは、民衆生活を支配し自らの論理においてそれを破壊しつくす国家権力の問題であり、また生活共同体である村内部におけるさまざまな策動、ひいては個々人の生活における権力の発生に関する問題であった。

十八戸の谷中村残留民と田中は、まさに生存ギリギリの生活の場において、強大で凶暴な国家権力との戦いに臨んでいた。林竹二によれば「ここには、『土族的』抵抗の精神とは徹底して異質的な、しかし、まぎれもなくもう一つの『抵抗の精神』がある」という。⁽¹¹⁾

ところで、林は晩年の田中を考察するにあたって新井奥達(一八四六―一九二二)に注目している。奥達はきわめて特異なクリスチャンであった。⁽¹²⁾彼は満二四歳の年(一八七〇年)に渡米し、キリスト教の異端・ハリスの「新生社」に入る。「新生社」では厳しい労働によって「私我」を殺し、「神息」の吸入によって神との合一をはかる神秘主義的な側面が強いキリスト教思想を学んだらしい。いわば「行い」を強調し「信仰のみ」を強調する福音主義とは対立する。その後奥達は米国に三〇年近く滞在し、一八九九年満五三歳の年に帰国したのであった。

田中は奥達と一九〇一年に出会う。聖書(新約聖書)をはじめ読むのは天皇への直訴後服役していた一九〇二年の獄中であつた。田中は奥達から何を学んだのだろうか。おそらくイエスに倣う者としての「行い」を重視すること(「欲望」を絶滅させ「新生」すること)、それは日常生活を修業の場とすることであつた。また奥達の「新生社」的な共同体思想に日本古来の自治村思想を結びつけた田中独自の「自治的共同体」を追求する糸口も与えられたのだろう。⁽¹³⁾

後に石川がいう「土民」精神の原型は、このように新井・田中型の生活態度に求められるのではなからうか。⁽¹⁴⁾したがって田中の驥尾に付していた石川が、田中の思想を自分のものになろうと苦悩し、そうした目で自らの所属する社会

主義陣営を見ていたことはごく自然なことだった。その結果石川は、社会主義運動の主流から離れマージナルな位置に自らを追いやることになったが、それだからこそ見えてきた問題点が少なくとも二点は指摘できる。

第一に、目的と手段の矛盾である。社会主義者たちは、自由・平等で搾取なき理想社会を建設するといっているが、社会党員たちは内部抗争(直接行動論と議会政策論との対立)に明け暮れている。ここに石川は矛盾を感じとったのであつた。⁽¹⁵⁾

第二に、思想と生活の矛盾である。いわゆる大逆事件後、堺利彦によってつくられた売文社に石川が参加しなかったのも、文は思想であり、しかも思想は生活そのものであるはずなのに、堺は糧のために思想を生活から切り離し、さらに文章として切り売りしようとしている。それを何とも思わない精神に搾取的生活のにおいを嗅ぎとったからである。⁽¹⁶⁾こうして石川においては、これらの矛盾を克服するために、自らの理想に制約され、それと矛盾しない生活を送ることが目標となったのである。いわゆる大逆事件前後、イギリスのアナキズム的思想家E・カーペンター(一八四四―一九二九)に深く心を奪われた理由もこうした観点からとらえることができる。

予はカーペンターに冠らずに「哲人」の名を以てした。蓋し彼の偉大なる所以は其詩と文と想とが善と美と真とを大成して居るのみで無く、實に是等の一切を彼自身の現実生活に於て統一して居る点に存するが故である。⁽¹⁷⁾

この点は、田中正造に通じるものがある。生活の矛盾のうちに権力は芽生えてくるものである。そうした小さな権力も、成長すれば独裁として巨大な暴力となりうる。したがって、石川が理想とする生活においては、目的と手段の矛盾を避けるために、目的は手段としてあらかじめ生活の中に体现されている必要があつた。「吾々に於ては、目的が手段を決定する。理想が生活を限定する」。⁽¹⁸⁾換言すれば、一方で国家権力と対抗しつつ(少なくともそうした気魄をもちつつ)、他方では自らの生活は無権力の場に組み替えて、それを社会に拡張していくという方法である。

吾々の理想社会は、たゞ吾々の自由連合によつてのみ招来せらるべきものである。そして、それには吾々自身各自の生活から改革して行くことが最も緊要であり、有効ではないであらうか。

こうした生活の在り方は、田中正造の生活の在り方と同じではなかったかもしれない。しかし国家権力への抵抗に、自分の全生活を賭けて打ち込んだ田中の精神の在り方は、まさしく「土民生活」の精神にふさわしい。だから石川は、田中を「土民生活の殉教者」としてたたえたのだし、また終生彼を師として仰ぐことになったのである。晩年、石川は田中正造逝去四〇周年において次のごとき感慨をも漏らしている。

田翁逝去満四十周年！ 万感交々といふところです。私の日本脱走も四十年前になります。お別れにのぞみ翁に誓ったことを一つも実行できず真に慚愧に堪えません。しかし形式上は実行できないでも、精神的には一貫して来たつもり、これだけは翁の前に立つて誇り得ると信じます。

田中の精神は、「土民生活」の精神として、石川に継承されたのであった。

二 永遠性への依拠——〈自然〉の発見

それでは、第二の飛躍をもたらした八年におよぶ滞欧生活とは、一体何であったのか。

そこでの生活は、五年近い百姓生活に集約される。石川はフランス南西部ドルドーニュ川沿いの高台にある小さな村ドナム(Donme)で百姓生活を送った。この地で石川は連日百姓仕事に明け暮れる。当時を石川は次のように述べている。

ルクリュ氏(ルポール、エリゼの甥)は非常に百姓生活に興味を持ち、私も共々、農業の本を読むたり、耕作したり、それはあらゆる種類のものを实地に研究したのである。私は此処で足掛け六年間の生活をしたのであるが、私の生涯中、これ程感激に満ちた幸福な生活はこれ迄なかった。

この結果、〈自然〉を発見することになったのである。〈自然〉の織り成す諸事象は互いに錯綜し複雑に絡み合っているが、支配従属関係はどこにも存在しない。いわば無権力の世界であり(ただしこの世界は人類の原始黄金時代に存在したのみで現在は失われている)、人間世界の対極を表現していると考えたのであった。だから石川はこの〈自然〉に直接・積極的にいかかわる百姓生活を次のようにみている。

百姓の生活には、人類生活の全部が織込まれてある。天文、地文、地理、地質の学問から、社会、経済の知識までが必要欠くべからざる要素になる。宗教の真意義も百姓をして初めて会得される。

ただその〈自然〉を発見する契機は、「私が初めて自然と言ふものに憧憬を持ちはじめたのは、監獄の一室に閉じ込められた時のことである」と自ら回想しているように、一九〇七―八年の入獄時であったようだ。当時石川は、キリスト教精神と社会主義精神の不調和に悩んでいたが、カーペンターの著作を通して、〈自然〉に依拠することで両者の調和を見出したといえる。

下獄後一九〇八年に出版された(ただし製本中に発禁処分)『虚無の靈光』は石川の心境が明白に語られている。第1章でもふれたように、汎神論的な自然観から宇宙＝自然を神とし、「絶対的虚無」(＝無我の究極)こそが「神人不二」の境地であると断じる。永遠性を媒介に神と〈自然〉を同一視するのである。しかし自我はさまざまな「物欲の蔭」に囚われ、この蔭は追えども追えども果てしがない。したがって私たちは、この囚われの自我を拡充するのではなく、「虚無」にかえって永遠性に基づいて「真我」を開発すべきなのである。この点について石川は次のようにいう。

(人は皆「永生の希望が真の希求」であることを忘れ「厭世自殺」に走ったりしているが)然れども一たび我が衷に蟠まれる「物欲の蔭」を断絶して且つ虚無に反り、天真爛漫たる本来の面目を開く時、流転生死の無常観は赫々たる靈光の中に熔化し去りて生滅不二に帰するのである。かくて動中に静あり、流転中に永生あり、虚無の中に実在を得るのである。

いわば永遠を志向するこうした心情が、ドナムにおける現実の農業体験であらためて〈自然〉に投影され、確信とな

つていったのであろう。

冒頭に掲げた論文「土民生活」に込められた「幻影を追ふことを止めて地に着き地の真実に生きんことを希ふ」という心情は、まさに『虚無の靈光』中の『「物欲の蔭」を断絶して且つ虚無に反」という方法を、具体的に「地」自然に求めたものにほかならなかった。この永遠への志向性は終生石川を貫いた精神であった。たとえば個人雑誌『デイナミック』閉刊（一九三四年一〇月）のさい石川はこう締めくくっている。⁽²⁷⁾

満五箇年の変遷を顧みると世間も自分も様々に動いてゐる。この小さなデナミックを顧みても多少の感慨を禁じ得ない。たゞ永遠性を把握した歴史、宇宙性を持った歴史、民衆の中に根を持つてゐる社会生活の真実の歴史、さうしたものを創作して見たいという念願が私の一切を決定するのである。かうした歴史は決して今の世に公けに出来ないものであるだらう。私は何時も永遠を思ふが故に、時間を限つた成業を願はない。

また一九三三年一月の『デナミック』誌上には次の石川の短歌が載せられている。

太陽のめぐりめぐりて われはゆく 足音立てずかぎりなきみち

これらの言説から、マルキシズムからファシズムへ、また左翼社会主義運動から右翼国家主義運動へと、さまざまなバリエーションをもちつつ変転していく一九三〇年代という時代相に惑わされず、不動の地点に確信をもつて生きる石川の姿が浮かび上がってくる。繰り返せば、それは「地」自然という永遠に足をつけていたからであった。これが「土民生活」の重要な側面だったのである。

また石川によれば、「土民生活」こそがギリシアの哲人ソクラテスやディオゲネスのような「コスモポリト」であるという。「コスモポリト」とは国民国家を前提とするインターナショナルではなく、全人類の同胞としての私、あるいは「宇宙（自然）」の意志に従つて生きる個人を意味する。すなわち第1章で見たような「自然」への全面的自己委任である。これこそが現実逃避ではなく、真に現実を生きることになるという。

現実を目を蔽はれた者は、やがて現実の濁流とともに断崖を転落する時があらう。吾々はもつと先きの平野を用意してはならない。（中略）吾々は囚はれたる現実盲者となつてはならない。多くの現実主義者が現実をさへ、生活し得ないで濁流に溺死するのを見る時、吾々は先づ岸に立つて大宇宙の自らを生活しなくてはならない。⁽²⁸⁾

こうして、「自然（大宇宙）」に従つて生きる「コスモポリト」はまた「土民」でもあり、たんなる田園生活者や東洋的な隠遁生活者とはまったく異なるのである。石川は「智慧の東洋と西洋」⁽²⁹⁾（一九三八年）なる論文で、東洋の老荘、孔子と西洋ギリシアのソクラテス、ディオゲネスとを比較している。石川によれば、孔子よりも老荘は優れているが、ソクラテスやディオゲネスには及ばないという。なぜなら「老子にも亦（孔子同様）ソクラテスの積極的闘争性がない。老子は隠守したが闘争しなかった」⁽³⁰⁾からである。石川が木下尚江や田中正造が師事した岡田虎二郎とその静座法を評価しなかったのも、それが「隠守」であり「闘争」ではなかったからだといえる。

「土民生活」がたんに自然に親しむ生活でなかったことは、次の経緯からも明らかだらう。石川が「土民生活」という用語をはじめて活字にしたのは、滞欧生活もまだ日の浅い一九一五年のことであつた。⁽³¹⁾この段階では契機はあつてもまだ「自然」の発見はなされていらない。したがつて「自然」の発見が「土民生活」を形成したのではないということである。しかも「土民生活」とは、カーペンターによる democracy の説明に由来することは前述したとおりだが、そのカーペンターに対し最初「日本の新井奥達先生に髣髴だな」と感じたが、その後になつて『田中正造翁の気分も多量に持つている』⁽³²⁾ことを思うた」と述べているように、新井奥達＝田中正造の精神の延長戦上にカーペンターを位置づけているのである。

したがつて、社会に遍在する権力の無化をめざす従来の問題設定の延長戦上に「自然」が発見され、そうした無権力世界としての「自然」、すなわち永遠性に根ざした「自然」の法則を現代社会において実現することこそが、石川の「土民生活」だったのである。この具体的な生活形態が帰農生活だったのである。